

「持続可能な発展」概念のあいまいさ

「持続可能な発展」概念の主要素

持続可能性と共生を学ぶ 第5回

本日の内容

- 第21回気候変動枠組条約締約国会議（COP21）
- 「持続可能な発展」概念のあいまいさ
- 「持続可能な発展」の主要素

持続可能な発展の国際会議

第21回気候変動枠組条約締約国会議（COP21）

- ・ 気候変動に関する国際協定（パリ協定）を採択(2015年12月) → 2016年時点で、192カ国とEUが参加
 - ・ 目標1：産業革命前からの地球の気温上昇を2°Cより十分低く保つ → 1.5°C以下に抑える努力をする
 - ・ 目標2：そのために、21世紀の後半に世界の温室効果ガス排出を実質ゼロにする
- ・ 日本の目標：2030年度の温室効果ガスの排出を2013年度の水準から26%削減（2005年比で25.4%減）

持続可能な発展の国際会議

第21回気候変動枠組条約締約国会議（COP21）

- ・ **各国の2030年度目標**：米国（2017年に離脱）、中国（CO2削減率で60-65% [2005年比]）、カナダ（30%減 [2005年比]）、ロシア（25-30%減 [1990年比]）、EU（40%減 [1990年比]）
- ・ 近年は、**カーボンニュートラル**、**カーボンネガティブ**など新たな指標も → 二酸化炭素の排出量と吸収量をプラスマイナスゼロ、さらには吸収量をプラスにする
- ・ 例）英国は、2050年までにカーボンニュートラルを達成することを法律で定める → **昨夜の速報で、日本も同様の目標を設定することになったらしい**

「持続可能な発展」概念のあいまいさ

- 例えば、滋賀県高島市のSDに向けた子育て支援政策 → どうなったら持続可能な高島市になったと言えるのか
- 政府や自治体の政策開発における難しさ → 何をどれだけやればSDが達成できたのかをどう測るか
- 5W1H + α : why, what, who, when, where, how, (how much, how far, how long etc.) → 具体的に考えるツール
- 誰がこれを考えるのか → ステイクホルダー（利害関係者）の議論と協働が重要
- つまりは、とっても抽象的、あいまいだということ

「持続可能な発展」概念のあいまいさ

- ・ この「あいまいさ」はSDの欠点として捉えられる → しかし、これは本当に「欠点」なのか？
- ・ この「あいまいさ」は、これまで世界共通なスローガンとして広まった理由であり、強みでもある → 歴史、文化、習慣、宗教、人種、民族、性別などに関係なく、人間社会の共通の道標を提示する
- ・ 持続可能な発展＝人間の行動の社会的規範、倫理的原則として、人間社会全体の枠組みを提示するもの
- ・ その「あいまいさ」をより具体的にするプロセスの重要なひとつが、多くの利害関係者による議論 → 地域ガバナンス論で